第４部　総　括

総　括

本書では、共同研究の主要課題として取り組んだ熊本県阿蘇市長目塚古墳出土遺物再整理作業の成果、および研究テーマにそくしてメンバーそれぞれが行った個別研究の成果について、第2・3部で報告した。

第2部に記した長目塚古墳出土遺物再整理報告にかんしては、その第4章で要点をまとめたので詳細はそれを参照していただきたいが、重要な点は長目塚古墳の築造時期が集成編年の6期後半から7期初頭、須恵器編年ではTK73型式段階後半からTK216型式段階初頭、すなわち古墳時代中期中葉でも早い段階であると考えられたことである。これが認められるとすれば、その時期は熊本県地域に窖窯焼成による円筒埴輪が導入される直前の時期であると考えられ、合志川中流域の熊本市植木町慈恩寺経塚古墳や熊本市城南町琵琶塚古墳との関連が想定される。さらに、墳長が111.5ｍで、その規模が熊本県地域でも五指に入る前方後円墳である点に加えて、前方部石室出土鉄鏃や墳丘出土須恵器の内容を考慮すると、古市・百舌鳥古墳群を造営した中央政権との密接な結びつきも想定される。長目塚古墳の築造意義は、たんに阿蘇地域のみではなく、日本列島における古墳時代の政治動向のなかで考察されるべきことがらなのである。なお、本書で提示した長目塚古墳の築造時期は、これまで壺形埴輪の存在から集成編年5期頃とされてきた従来の見解とは大きく異なる。今後は、壺形埴輪の編年やその時期的位置付けについてもさらに議論が深められる必要がある。

第3部で示された個別研究成果のうち、第1章の緒方論文では、長目塚古墳の前方部が発掘調査されるに至る過程およびその後の経過が阿蘇神社所蔵文書などをもとにまとめられた。中通古墳群所在古墳を神社神陵として大切に守ってきた阿蘇神社が苦悩しながらも地域住民の安全と生活を守るために長目塚古墳前方部の破壊を許可するまでの過程、さらに1949・1950年（昭和24・25）という戦後すぐの物資不足のなか、また文化財保護法施行以前の当時において、苦労しながらも発掘調査を完遂した関係各位の様子が詳細に描き出されている。発掘調査で検出された人骨や人歯が、移築された石室とともに埋め戻されたという記述も発見された。緒方も述べるように、長目塚古墳の発掘調査は戦後の熊本県における埋蔵文化財調査の原点にも位置付けられるものであり、人々の暮らしと遺跡保護の両立という現在にもつながる重い課題を我々に鋭く問いかけてくる。

第2・3章の2つの論文は、八代海沿岸地域を中心とした古墳時代在地墓制の展開について考察したものである。髙木・芥川論文では、天草砂岩を用いて構築された埋葬施設が集成され、その分布が八代海沿岸地域と宇土半島北岸地域にほぼ限られること、そして天草砂岩の埋葬施設への使用は箱式石棺から始まり、やがて竪穴式石室や横穴式石室にも用いられるようになるが、集成編年5期から6期前半になると阿蘇溶結凝灰岩の利用が開始され、徐々に天草砂岩の使用が減少していくという大きな流れが示された。天草砂岩を用いた埋葬施設は、一部、岡山市千足古墳や鹿児島県南さつま市奥山古墳などにもみられるが、本論文で提示されたデータは、八代海沿岸地域に特有の墓制が古墳時代にどのように展開していくのかを考察するうえでのきわめて重要な基礎資料となる。古城論文は、八代海沿岸地域を特徴づける埋葬施設である石障系石室がどのように出現するのかを考察したものである。屍床配置の変化を軸にすえて考察する点が特徴で、熊本県上天草市千崎5号墳のような右側（羨道からみた場合の方向）1列配置から川の字形配置、そしてコの字形配置への変遷が想定された。そしてそうした変遷過程のなかの川の字形配置屍床の石室において、屍床全体を板石で囲うことが開始され、それに箱式石棺で行われていた石材加工技術が採用されて石障が成立したと考察された。古城も述べるように、千崎5号墳を初現期におくと、その羨道床面と玄室床面はほとんどレベル差をもたないから、従来考えられてきた羨道（横口）床面と玄室床面との高低差が大きいものから小さいものへという変遷観とはまったく一致しないことになる。こうした点にさらなる検討の余地があるが、天草

砂岩を用いた箱式石棺と石障系石室との関連は明らかであり、またそうしたものに円文などの装飾文様が描かれることも多いから、八代海沿岸地域の墓制を考察するうえでは今後も両者の影響関係を追求することがきわめて重要であると考える。

第4章の木村論文は、熊本県地域の主要古墳で出土した土器の内容分析から、土器を用いた葬送儀礼の時期的変化と地域差を追求したものである。この種の検討は熊本県地域ではほとんど行われていないため、将来の研究のための貴重な基礎データが提示されたといえる。また、熊本県央地域（木村によれば宇土半島基部地域から八代平野地域までの範囲）では高坏を用いることが多い点など興味深い指摘がいくつかなされている。今後、出土位置や一括性によりいっそう注意を払いながら使用場面ごとに分類し、さらに古墳時代前期から中期では小方墳（方形周溝墓）や小円墳など、後期では横穴などのデータを加えて分析すれば、全国の他事例と比較検討することができる良質なケーススタディの提示につながると思われる。

第5・6章の2つの論文は、長目塚古墳出土遺物の詳細な観察にもとづくものである。三好論文では、古墳時代中期の長頸柳葉鏃の細部形態に着目し、熊本県地域の中期古墳出土長頸鏃を分類してその変遷過程が示された。細部形態の分類では、頸関の台形関を、頸部下方が直線的に広がる台形関aと、頸部下端で屈曲して台形状に広がる台形関bに細分した点が重要で、それにより角関から台形関bへの変遷がスムーズに説明されるようになった。そして、長頸鏃がもつ諸要素の変化から、熊本県地域の中期中葉から後葉の古墳が三段階に区分された。今後、長頸柳葉鏃以外の鉄鏃についても、同様の検討が行われることが期待される。西嶋論文は、長目塚古墳出土のガラス玉190点すべての観察から、ガラス玉小口面に施された処理技法とガラス玉の大きさ、さらに大きさと色調とのあいだに有意な関係が存在することを指摘したものである。たとえば、小口面を再加熱で処理したものは小型に多く、一方連珠法で製作されたものは大型に限られること、また、淡青色系統の透明感のある一群はほとんどが小型に、濃紺色系統の透明感のある一群はほぼすべてが中型に、透明感にとぼしく白みがかった青色系統の一群はほぼ大型に限られることなどが示された。さらに、色調と製作技法も関連性を有することが示唆された。今後、地域、時期を違えてほかの古墳出土のガラス玉も調査、分析すれば、ガラス玉の入手、流通形態にまで議論をおよぼすことができる可能性がある。

第7章の藤本論文は、消費地遺跡で出土する天草式製塩土器の意味をさぐろうとしたものである。天草式製塩土器による塩生産は古墳時代中期後葉から終末期にかけて、天草下島から宇土半島の有明海に面したいくつかの遺跡で行われた。天草式製塩土器はワイングラスのような形状をなすが、その脚部を折り取った碗部のみがしばしば内陸部の遺跡で発見される。藤本はそうした遺跡を消費地遺跡とし、6世紀初頭から後半までは菊池川中・下流域に、6世紀末から7世紀後半にかけては白川下流域に多いことを明らかにした。そして、消費地遺跡出土の製塩土器はその内容物である塩とともに祭祀行為に供された可能性を認めつつも、それは現時点では明確でないとした。製塩土器を用いた塩生産は、どの時期でもまたどの地域でも普遍的に行われたものではない。したがって、日常生活のみに結びつく生産活動でなかったことは容易に想像されるが、では、何のために行われていたのか。今後は、他地域における製塩土器の様相も念頭におきつつ、古墳の動向をも視野にとらえて分析する必要があるだろう。

第8章の志賀論文では、長目塚古墳をはじめとする阿蘇市域の遺跡で出土した赤色顔料の分析結果が提示された。長目塚古墳にかんしては、勾玉と管玉には朱のみが、ガラス玉には朱とベンガラの両方が、銅鏡と埴輪にはベンガラのみが付着することが明らかにされた。おそらく、被葬者の上胸部にのみ水銀朱がまかれていたのだと思われる。さらに、今回分析された阿蘇市域出土のベンガラはすべてパイプ状粒子（直径1μm程度）を含まないベンガラ（ベンガラ（非P））であることが示された。また、ベンガラ（非P）のなかに通常のパイプ状粒子よりも10倍以上太い巨大なパイプ状ベンガラ粒子を含むものがあることが明示され、従来ベンガラ(非P)と一括していたものを細分できる可能性が示唆された。阿蘇谷西側の地中には褐鉄鉱(リ

モナイト）が豊富に分布しており、当地の弥生時代後期の遺跡ではこれを原料としたベンガラ生産が行われていたことが推定されている。今後、阿蘇谷のベンガラの特徴がより明確にとらえられれば、弥生時代から古墳時代におけるベンガラの生産と流通の研究が大いに進展すると思われるが、本論文で提示されたデータはそうした研究に大きく寄与するものといえるだろう。

さて、「有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究」をテーマに、当該地域の古墳時代研究を少しでも進展させるべく共同研究を進めてきたが、そうしたなかにおいてますます強くなってきた思いは、資料の公開と共有、後代への継承を確実にすること、さらにそうした活動を含めた文化財の調査、保護、活用に情熱をかたむけることができる人材を育成することが今もっとも必要とされることの1つなのではないかというものである。これらのうち後者については別のところ［杉井 2014］にも記したのでここでは繰り返さないが、前者は、これまで文化財行政あるいは日本考古学界を支えてこられた方々が鬼籍に入られることが多くなってきた今日、喫緊の課題ではないかと感じている。

本共同研究の中心課題として取り組んだ長目塚古墳出土遺物の再整理作業はそうした活動の一端をになうものでもあったが、ほかにも本研究を進めるなかで、かつての調査資料の現状をいくつか調査し、またこれまで知られていなかった古墳の存在を確認することができた。以下に、それらを紹介しておきたい。

まず、長目塚古墳出土遺物の再整理作業を進めるなかで、『熊本県文化財調査報告』第3集［坂本 1962］において「阿蘇神社蔵　伝中通古墳出土」とされた土器の来歴が明らかとなった。それは図58に示すもので、同じものが図59のように須恵器提瓶2点が追加されたかたちで『熊本県文化財調査報告』第46集［島津編 1980］にも再実測されて掲載されている。さて、結論から述べると、これら土器は阿蘇市平井古墳出土のものと判断できる。その根拠となる資料は中村徳五郎による報告［中村 1924］で、そこに平井古墳出土遺物として示された土器の略図（本書12頁の図11）が、図58・59で提示された阿蘇神社所蔵土器に対応すると認められるのである。すなわち、中村が記した土器の特徴をもとに検証すると、中村の「い」の高坏（図11）は図58-1および図59-4の土師器高坏に、「ろ」

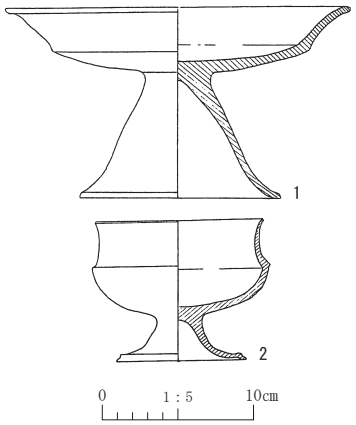

図58　阿蘇神社所蔵土器実測図（坂本 1962 掲載分）

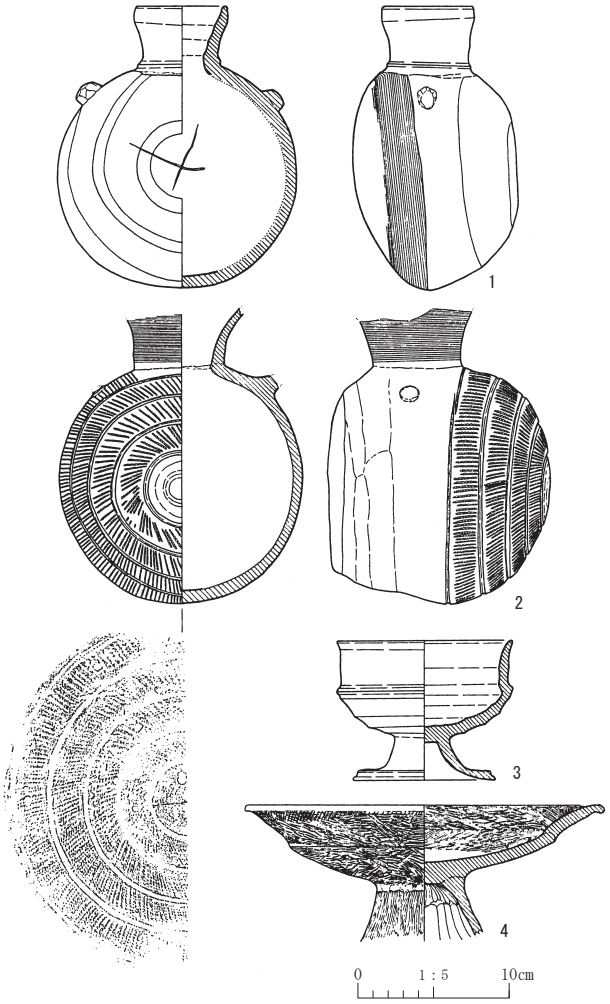

図59　阿蘇神社所蔵土器実測図（島津編 1980 掲載分）

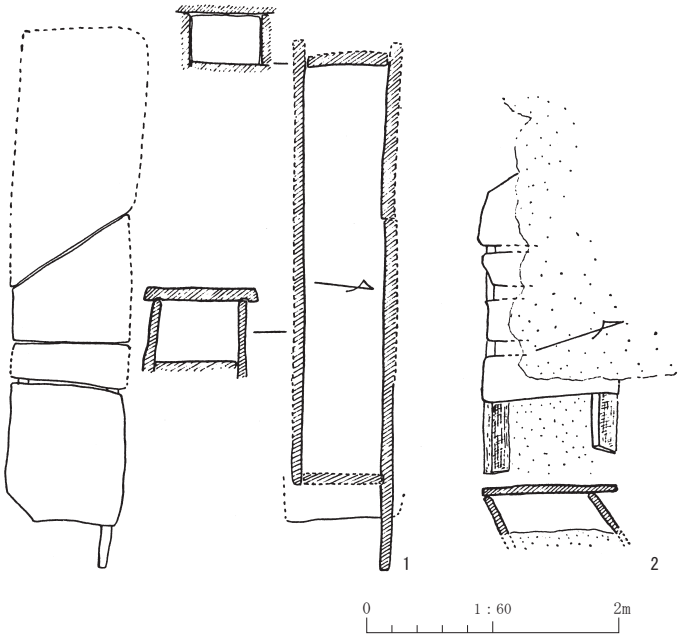

図 60　東手野古墳群の箱式石棺実測図（乙益 1962 掲載）
1．丸山第 1 号石棺　2．和田家墓地の石棺

の高坏は図 58-2 および図 59-3 の須恵器高坏に、「は」の提瓶は図 59-2 に、「に」の提瓶は図 59-1 に相当すると考えられる。なお、坂本 1962 で提示された土師器高坏（図 58-1）は完形であるのに対し島津編 1980（図 59-4）では脚裾部が欠失しているが、阿蘇神社所蔵資料のなかに完全なかたちではないがその部分の破片が存在することも確認した。

次に、『熊本県文化財調査報告』第 3 集［乙益 1962］のなかで紹介された阿蘇市東手野古墳群の箱式石棺 5 基のうち 3 基の現状を確認することができた。まず、丸山の石棺とされたうちの第 1 号石棺は、かつての実測図（図 60-1）とほとんど変わらない状態で保存されている（図 61 ～ 63）。安山岩板石による箱式石棺で、長側石および蓋石の小口石と接する部分には凹状の浅い刳り込みが施されている。図 60-1 によれば床石が存在すると思われるが、現状では土砂に埋もれて観察できない。第 2 号石棺は乙益 1962 において残骸となった石棺石材が積まれているのみであると報告されたが、おそらくそれと思われる石材が、第 1 号

図 61　丸山第 1 号石棺の現状 (1)

図 62　丸山第 1 号石棺の現状 (2)

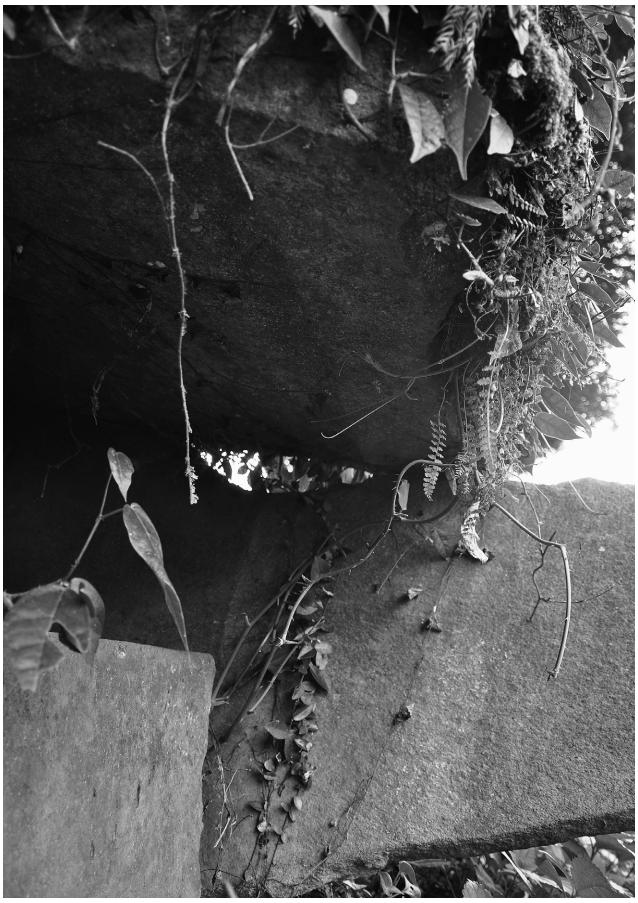

図 63　丸山第 1 号石棺の現状 (3)

図 64　丸山第 2 号石棺の現状

図 65　秋葉権現塚の石棺の現状

石棺が位置する小さな高まりの上に四角く立て並べられている（図 64）。秋葉権現塚の石棺とされたものは実測図の提示がなかったが、近くに秋葉山大権現と記された石碑が建つ点で乙益 1962 の記述と共通することから、それと特定することができた（図 65）。ほかに、乙益 1962 には和田家墓地の石棺（図 60-2）および観音堂前の石棺にかんする記述もあるが、それらの現状を確認することはできなかった。

最後に、新たに存在を確認した古墳について記しておく。それは、天草諸島の北部、大矢野島と上島にはさまれた狭い海峡に浮かぶ樋合島（熊本県上天草市松島町合津樋合）の西端に位置する箱式石棺 3 基である（図 66-1）。樋合島は、カミノハナ古墳群が所在する永浦島のすぐ西側にある島で、これまでも竪穴系横口式石室を有する瀬崎古墳や円丘をもつ保ヶ島古墳、内部主体が石障系石室の可能性がある梅ノ木古墳等の存在で一部の研究者には知られていた。その樋合島の最西端に地元の方がカシノキ島の鼻と呼ぶ小さな岬がある。

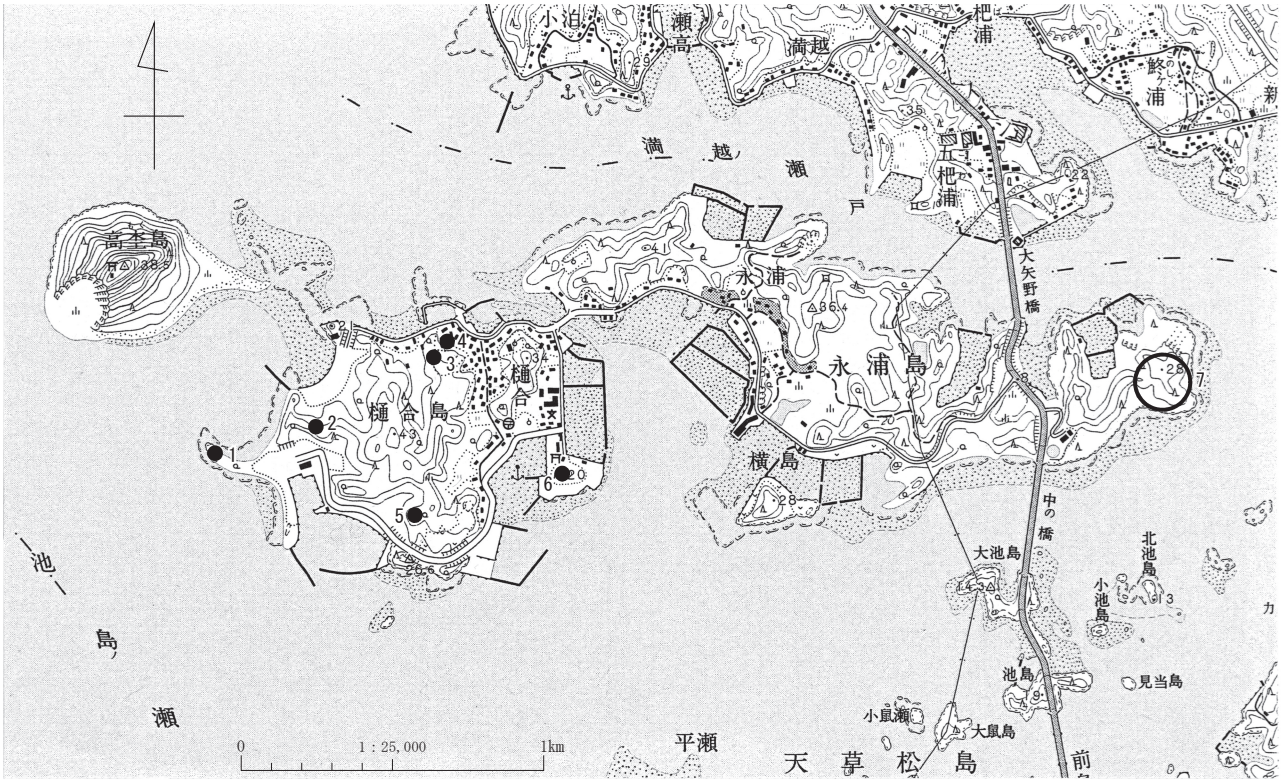

図 66　2011 年までに所在を確認した樋合島・永浦島の古墳

1. カシノキ島古墳群　2. 梅ノ木古墳　3. 塚大明神古墳　4. 瀬崎古墳　5. 保ヶ島古墳　6. 宮島古墳　7. カミノハナ古墳群

図 67　カシノキ島古墳群遠景（丸の位置に石棺 1 露出）

図 68　カシノキ島古墳群の石棺 1(1)

図 69　カシノキ島古墳群の石棺 1(2)

図 70　カシノキ島古墳群の石棺 2

図 71　カシノキ島の鼻の海岸にある砂岩転石

おそらくかつてはごく小さな島であったが、砂州などの形成により樋合島と陸続きになったと思われる。その岬先端のやせ尾根上に、遺跡地図未掲載の箱式石棺が存在することを確認した。露出する石材を根拠にすると現状で 3 基の存在を確認でき、いずれも天草砂岩製の箱式石棺で主軸を尾根筋に直交させる。うち 1 基は、図 67 ～ 69 に示すように、北向きの崖面に小口があらわれており、小口石は落下して存在しない。底石はなく、長側石および蓋石の小口石と接する箇所には凹状の刳り込みが施されている。ほかの石棺は図 70 のように石棺石材上端を地表面に露出させるのみである。この岬の海岸には砂岩の転石が多くみられる（図 71）。なお、この石棺群の発見は上天草市文化財保護委員の山崎勝安氏によって行われ、連絡を受けた杉井および上天草市教育委員会が 2011 年に現状を確認した。地名をとって、ひとまずカシノキ島古墳群と呼称しておきたい。

おわりに　古墳動向を分析し、首長墓と在地墓制の関係をさぐろうとしても、かんじんの基礎資料の整理、報告がなされていないと、研究を進めるうえで相当の支障を来す。これは研究のみに限らない。古墳などの史跡を整備し、保存、活用をはかる際にも、その史跡にかんするデータが整理され、また公開されていないとさまざまな問題が発生する。熊本県所在古墳について考えようとするとき、こうした困難にしばしば直面する。

以前にも記したことがあるが［杉井 2010］、熊本県地域には墳長が 100m を超す前方後円墳が 6 基ある。それは、菊池川下流域の玉名市稲荷山古墳、菊池川中流域の山鹿市岩原双子塚古墳、宇土半島基部地域の宇土市天神山古墳、砂川流域の氷川町大野窟古墳、氷川流域の氷川町中ノ城古墳、そして本書で報告した長目塚古墳であるが、これらのうち稲荷山古墳と岩原双子塚古墳の埴輪は正式には未報告である。本書の刊行までは長目塚古墳もそうした未報告古墳の 1 つであった。

こうした大規模な古墳以外でも、地域の首長墓系譜を検討するうえで鍵となる古墳は数多くあるが、そうした古墳のなかにも情報が正しく公開されていないものが目立つ。一例をあげれば、玉名市伝左山古墳や和水町椿山古墳、山鹿市中村双子塚古墳、宇城市国越古墳、錦町亀塚古墳群などは、発掘調査資料の整理、公開が切望される古墳である。

このような首長墓系譜研究の核となる古墳でさえ十分な情報を知ることが困難であるのだから、小規模な在地の墓制、たとえば箱式石棺などの情報を個人で網羅することはほとんど不可能である。しかし、八代海沿岸地域に築かれた箱式石棺は、石障系横穴式石室の出現と展開を考えるうえできわめて重要な意味をもつ。したがって、とくに八代海沿岸地域や有明海沿岸地域における古墳時代社会の動向を考えるためには、在地墓制の情報を集め、首長墓の様相と比較検討する作業が欠かせないのである。

そうした目的を達成するためには、やはり資料の公開が肝要であると考える。今のような未公開資料が多いという状況を少しでも改善すべきである。そうした考えのもと微力ながらさまざまな活動を行ってきた。本共同研究もその実践の 1 つであった。今後は、よりいっそう、地域の文化財行政をになう地方自治体およびその職員の方々との連携を深めるとともに、そうした調査、研究活動の実施が将来を支える若い人材の育成にもつながるよう模索したいと思う。

（杉井　健）

第 4 部 引用・参考文献

乙益重隆　1962「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第 3 集、熊本県教育委員会：pp. 41-70
坂本経堯　1962「阿蘇長目塚　附小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第 3 集、熊本県教育委員会：pp. 1-40
島津義昭編　1980「塩塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第 46 集、熊本県教育委員会：pp. 1-23
杉井　健　2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集、九州前方後円墳研究会：pp. 131-184
杉井　健　2014「記憶をつなぐために－埋蔵文化財行政と大学－」『先史学・考古学論究』Ⅵ　考古学研究室創設 40 周年記念論文集、龍田考古会：pp. 335-344
中村徳五郎　1924「阿蘇中部の舊跡及び古墳に就いて」『歴史地理』第 43 巻第 6 号、日本歴史地理学會：pp. 35-44

第 4 部 挿図出典

図 58：坂本 1962
図 59：島津編 1980
図 60：乙益 1962
図 61 ～ 65・67 ～ 71：杉井健撮影